『ドイツ語文化圏研究』 第9号　抜刷
2011年11月20日発行

# 日本語の直喩表現はどのように翻訳されているか

## ― 三島由紀夫の『愛の渇き』のドイツ語訳を手がかりに ―

# Wie übersetzt man japanische Vergleiche ins Deutsche?

## ― Anhand einer Gegenüberstellung von Mishima Yukios Roman „Liebesdurst“ mit der deutschen Übersetzung ―

宮内 伸子
MIYAUCHI, Nobuko

日本独文学会北陸支部

# 日本語の直喩表現はどのように翻訳されているか

## ― 三島由紀夫の『愛の渇き』のドイツ語訳を手がかりに ―[1]

宮内 伸子

### 1．はじめに

筆者はここ数年，日本文学作品とそのドイツ語訳を対照させて，日本語とドイツ語の言語表現のずれを手がかりに，それぞれの言語で好まれる表現や発想のちがいについて考察を重ねてきた。その試みの最初に取り上げたよしもとばななの作品では「成り行き」的表現に注目し，次いで川端康成の作品では意図的に曖昧さを保つ書き方に焦点を当てた。今回は三島由紀夫の作品を素材にして，比喩，とりわけ直喩をめぐる表現について考えてみたい。

三島由紀夫（1925-1970 年）は二十世紀日本文学を代表する作家の一人であり，川端康成，谷崎潤一郎などと並んで早くから多くの作品が海外に紹介されている。ドイツ語に翻訳されている作品も多数あるが，英語訳からの重訳も多い。本稿ではそのようなものは避け，日本語から直接訳されたものの中から『愛の渇き』（原作 1950 年，ドイツ語訳 2000 年）を考察対象として選んだ。ただし英語訳（1969 年初版）も参照する。

三島の作品は，一般に明晰で理知的な書き方がされており，川端に比べるとドイツ語へ移しやすそうな印象を与える。三島の魅力の一つは，比喩などのレトリックを駆使した凝った文体であろうが，『愛の渇き』にも卓越した比喩，とりわけ直喩がちりばめられている。それらの華麗とも言える比喩表現は，どのようなドイツ語に翻訳されているのだろうか。本稿では，三島の

[1] 本稿は日本独文学会北陸支部研究発表会（2010 年 11 月 13 日，於：金沢）での口頭発表「日本語による直喩表現の訳し方――三島由紀夫の『愛の渇き』のドイツ語訳を手がかりに――」を元に加筆修正しまとめたものである。

直喩に焦点を定め，ドイツ語訳と対照させて検証を試みる。三島のそれのみならず，直喩そのものの本質の一端にも迫れればと思う。

## 2．華麗な比喩表現

### 2.1. 三島由紀夫の人と文体

三島由紀夫が，日本の伝統的理想像の復権をねらって，自衛隊市ヶ谷駐屯地（東京）に乱入し，大方の見方からすれば当然の，そしておそらく本人の予想通りでもあったであろう結果に終わったあの事件から，四十年が経過した。この事件は，当時すでに多くの三島作品が翻訳されていた海外にも衝撃を与え，作品の受容に大きな影響を及ぼした。[2]

川端康成も，ノーベル文学賞受賞講演「美しい日本の私」での主張からうかがえるように，三島同様，日本文化と自らとの強いつながりを意識しているが，二人の作家の文体は大きく異なる。川端の文章が余白と余韻に重きを置いた，ある意味暗示的なものであるのに対し，三島の文章はことばが理知的に駆使され明確である。川端流の日本文化のとらえ方をするならば，そのような明晰な日本語表現と，命を賭けてまで日本の伝統的理想像の復権を目指した三島の主張は結びつかないようにも思える。三島の文章は理屈で構築されていて，川端が「美しい日本の私」で引き合いに出した良寛の詩歌や書[3]とは趣がまったく異なる。

しかし，たとえば柴田翔が，目下ドイツで刊行中の和独辞典に対する書評の中でわかりやすく説いているように，[4] 日本語は和文脈，漢文脈，欧文脈

---

[2] ドイツでの三島受容については，『愛の渇き』ドイツ語版のあとがき（日地谷＝キルシュネライトによる）でも簡潔に解説されているが，Hijiya-Kirschnereit/Bierwirth (Hg.) (2010) に詳しい。また，Ando/Hijiya-Kirschnereit/Hoop (Hg.) (2006)で三島作品のドイツ語訳が出版されたときの新聞等での書評を確認できる。
[3] 川端（1969）：13－16 頁。
[4] 柴田（2011）：205－208 頁。

の三層構造になっていることを思い出すなら，このことは不思議ではないのかもしれない。すなわち，三島にとっての日本文化は漢文脈ないしは欧文脈とつながる部分が大きかった。[5] 三島にはもともとギリシア的世界への憧憬があり，ヨーロッパ的な論理思考への親近性がある。ヨーロッパの理屈が日本回帰へと反転し，日本の伝統的理想像を理屈で再構築した結果が，市ヶ谷への突入という行動を引き起こしたとも言えるのかもしれない。

「三島にとってはいかなる欲望も決して自明のものではない」[6] ゆえに，三島においては，アルベルト・モラヴィアの言うように，すべてがわざとらしく計算ずくであるのかもしれない。モラヴィアは三島の文章について，「凝り過ぎて，ときに曖昧な，飾り立てた，気取った文体」で，志賀直哉や谷崎にある神秘性や単純な迫力がない，突き抜けたところがない，あくまで人工的な感じがすると述べている。[7] このすべてに人工的な感じについてはヘン

---

[5] 三島自身は日本語について，自らの『文章読本』の中で次のように述べている。
「日本には，日本独特の抽象概念というものがなかったので，平安朝の昔から男性は抽象概念をすべて外来語によって処理してしまう習慣になっていました。そして日本語独特の抽象概念にあたるものは，いつも情緒の霧にまといつかれ，感情の湿度に湿潤されて，決して抽象概念すら自立性，独立性，明晰性を持つことはできませんでした。むしろこのような言葉の曖昧さの性質は，男女の区別なしに民衆のなかに浸透して，民衆の文学が生まれる素地を作ることにはなったが，これはまたあとの問題であります。／このように考えてくると日本の文学はというよりも，日本の根生（ねおい）の文学は，抽象的概念の欠如からはじまったと言っていいのであります。そこで日本文学には抽象概念の有効な作用である構成力だとか，登場人物の精神的な形成とか，そういうものに対する配慮が長らく見失われていました。男性的な世界，つまり男性独特の理知と論理と抽象概念との精神的世界は，長らく見捨てられて来たのであります。」（『文章読本』18 頁。ただし段落替えは斜線で区切った）
「根本的には日本人が日本語を使う以上，長い伝統と日本語独特の特質から逃れることはできないのであります。日本文学はよかれあしかれ，女性的理念，感情と情念の理念においては世界に冠絶していると言ってもよろしいでありましょう。」（同書，20 頁）

[6] ラバテ：255 頁。

[7] モラヴィア（1990）：243-246 頁。三島のこの人工的な感じについて，石原慎太郎はあるインタビューで，「結局，あの人は全部バーチャル，虚構だったね。最後の自殺劇だって，政治行動じゃないしバーチャルだよ」と語っている（中央公論編集部（2010）：81 頁）。ドナルド・リチーは，小説家としての三島は作品の登場人物の人生ばかりか，友人の人生まで操っていたような節がある，三島はすべての筋書を自分で書いた戯曲

リー・ミラーの言う「ミシマのまじめさ」とつながるところがありそうである。[8]

三島の文体は，総じて理知的で技巧的と称することができるだろう。理にかなった骨組みの上に，ことばが計算しつくされた順序で並べられる。文体の具体的な特徴の一つとして，三島作品の英訳者の一人であるジョン・ベスタは，「きわめて独創的なメタファーとイメジャリーの用法」[9] を挙げている。また日地谷＝キルシュネライトは，「三島由紀夫は，まさにバロックで比喩に富んだ作家である」[10] あるいは「パラドキシカルなイメージや言い回し，撞着語法が読者の思考にねじこまれる」[11] と書いている。

三島が自身の『文章読本』の中で，小説における形容詞の問題に絡めて，比喩について語っているところを紹介しておこう。比喩は機能においては形容詞と共通しているので，[12] 三島が形容詞の説明の流れで比喩について語っているのも不思議はない。

> 次に形容詞の問題ですが，形容詞は文章のうちで最も古びやすいものと言われています。なぜなら，形容詞は作家の感覚や個性と最も密着しているからであります。鷗外の文章が古びないのは形容詞が節約されているためでもあります。しかし形容詞は文学の華でもあり，青春でもありまして，豪華なはなやかな文体は形容詞を抜きにしては考えられません。それは同時に，「のように」というような言葉を伴った比喩的表現

---

を演出する演出家のような存在だった，と述べている（リチー（2001）：2 頁）。

8 岡本（1990）：259 頁。

9 ベスタ（1990）：240 頁。

10 日地谷＝キルシュネライト（1994）：189 頁。

11 Hijiya-Kirschnereit (2000b): S.236.

12 たとえば，「ブリタニカ国際大百科事典」（2008）では，比喩を「文学的な表現において，心象 image を利用して，説明，記述をわかりやすくし，強調や誇張の効果をあげるために，類似した例や形容で表現すること」と定義している。

と親しい関係にあり，岡本かの子氏の文章などは形容詞と比喩の花園であります。[13]

また，同じ『文章読本』の末尾につけられた質疑応答の章では，次のように述べている。

非常に適切な比喩は，小説の文章をあまりにも抽象的な乾燥したものから救って，読者のイメージをいきいきとさせて，ものごとの本質を一瞬のうちにつかませてくれます。しかし比喩の欠点は，せっかく小説が統一し，単純化し，結晶させた世界を，比喩がまたさまざまなイマジネーションの領域へ分散させてしまうことであります。ですから比喩は用いられすぎると軽佻浮薄にもなり，堅固な小説的世界を，花火のように爆発させてしまう危険があります。ジャン・コクトオの小説のなかから，いかにもうまい比喩のいくつかを拾ってみましょう。

「どのような神秘な法則が，ギヨムや，ヴァリッシュや，ド・ボルム公爵夫人の如き人々を，水銀の如く結びつけるのであろうか」

「人々は，恰も木蔦が石像を犯すように，脱疽に侵されてゆく彼を見殺しにしなければならなかった」

「人々は急行列車のような響をたてて通過する我軍の弾丸と，優しい花押(かきはん)の最後を，雷と死の黒いしみで結ぶ，ドイツ軍の砲弾との，編棚の下で暮していた」

「彼は道を続けた。また他の死骸に出会った。今度のは虐殺されて，酔っぱらいに脱ぎ捨てられたカラーや，靴や，ネクタイや，ワイシャツの

13 三島（1973）：180-181 頁。第七章「文章技巧」，「文法と文章技巧」の項より。ただし下線は宮内による。

ように投げ出されてあった」（河盛好蔵氏訳）[14]

これらの叙述を読むと，三島が比喩と言った場合，直喩が主に念頭にあったことが推察できる。

## 2.2. 直喩は論理的な文彩

比喩とは二つのもの（状態や動作も含む）の類似性をもとにした修辞技法であるが，その基本形と言える直喩は「或るものや状態，動作などを，明示的に別のもの，別の状態，動作などになぞらえる表現」と定義される。「明示的に」という点が隠喩と直喩を分ける目印で，具体的には「(～の）よう」等の「なぞらえ信号」をもつか否かで両者は区別される。なぞらえ信号としては他に，「～に似ている」，「まるで～のよう」，「～みたい」，「～めいた」，「～ふうな」，「～と同じ」，「たとえば～のよう」，「～に比すべき」，「～しそうな」といったものが挙げられる。[15]

直喩はこのように「なぞらえ信号」を伴うぶん，隠喩よりも洗練度の低いレトリックのように見えることもあるが，実はこのなぞらえ信号のおかげで，誤読される危険を冒さずに，大胆な，ときに奇抜な比喩も作りやすいのである。ジョン・ベスタは三島の比喩について，きわめて独創的で唐突で無理なものにも見えかねない，また西洋語の比喩の影響も見られる，と述べているが，[16] 三島のような書き方をする作家にとって，直喩はまさにうってつけで不可欠な修辞技法と言えるだろう。

---

14 三島（1973）：225-226 頁。「附　質疑応答」の章から「十四，いい比喩とはどういうものでしょうか」の項。ただし下線は宮内による。

15 佐藤信夫他による『レトリック事典』(2006) の直喩の項の説明による。「なぞらえ信号」とは，二つのものごとの類比的な照応関係を表す特定のことばのことで，この『レトリック事典』の編者がハラルト・ヴァインリヒの「反語信号」になぞらえて命名したもの。

16 ベスタ（1990）：240 頁。

## 3．日本語の直喩表現はドイツ語にどのように翻訳されているか

さて，直喩表現に注目して，三島由紀夫の『愛の渇き』をそのドイツ語訳とつき合わせた結果を以下に報告する。wie を用いた訳が多かったのは事前の予想どおりであったが，その他では接続法第二式を用いた訳がかなり多いのが目を引いた。訳のパターンを，以下のように４グループに分類してみた。当該の直喩がどのようなものとして解釈されたかを，ドイツ語訳に使われた表現（用語や形式）から分類したものである。

1. 比較・同等・同類・例示として訳出（wie などを用いて）
2. 現実的な説明・限定として訳出（形容詞にするなどして）
3. 単なる想像（非現実）として訳出（接続法第二式などを用いて）
4. 対象が発する印象として訳出（wirken, gelten, scheinen などを用いて）

以下，それぞれについて文例を紹介していく。なお本稿は原作とドイツ語訳の対照を課題とするが，参考までに英語訳も添えておく。

### 3.1. 比較・同等・同類・例示として訳出

（１）美代が真田紐で行李を背負って石段を下りてゆくあとから，悦子は警官のようについて行ったのだった。（原作 189 頁）

Miyo, den Tragekorb mit einem Band auf den Rücken gebunden, stieg die Steintreppe hinunter, Etsuko wie ein Gendarm hinterher. （ドイツ語訳 S.188)

Her wicker trunk held to her back by a braided-palm cord, Miyo had descended the stairway, followed shortly by Etsuko looking like a constable.

(英語訳 p.165)

（2）さまざまな揣摩憶測が再び悦子のまわりに物見高い垣根をつくった。悦子はこの垣のなかを，退屈そうに，ものうげに，しかし人目をかまわぬ闊達なしどけなさで，ひねもす行きつ戻りつしている一羽の走禽類のようであった。（23 頁）

Gerüchte über Gerüchte bauten um Etsuko herum einen die Neugierde ständig schürenden Zaun. Gelangweilt, matt, jedoch nicht ohne unbekümmerte, großzügige Lässigkeit schritt sie den ganzen Tag in diesem Gehege auf und ab wie ein Laufvogel. (S.27)

All kinds of conjectures built around Etsuko a wall that excited new curiosity. Inside this wall she came and went, bored, weary, yet with abandon, like a lone running bird. (p.20)

まずは wie を用いたわかりやすい例である。（1）（2）とも，悦子（A）の中に瞽官ないし走禽類（B）との類似を見出しての表現であるが，（2）のドイツ語訳をよく見ると，Bではなく Aがひねもす行きつ戻りつしている，ことになっている（英語訳も同じ）。

（3）この腰の果実のような実り具合，瞽て一度は悦子も持っていたこの発条のような曲線，この重いどっしりした水を満えた花瓶のような量感……（173 頁）

Solch runde Hüften, wie reife Früchte, so elastische Kurven hatte auch Etsuko einst besessen, eine schwere, massive Fülle wie eine volle Vase. (S.174)

The ripeness of her hips – like fruit. Those curves like coiled springs that

once Etsuko too had possessed. That expansiveness, like a heavy, massive flower vase brimming with water. (p.152)

（3）には「～のような」が3か所含まれているが，そのうちの2か所はwieで訳され，1か所は第2グループに分類した形容詞化で処理されている。ちなみに英訳の方は3か所ともlikeを用いている。massiveという同じ綴りの単語が独訳英訳両方の中にあるが，ドイツ語の方は「量感」に，英語は「花瓶」を形容するものとして使われている。

（4）光りは大阪郊外の住宅街の群落の上に，さしのべられた白い無力な手のように落ちていた。（9頁）

Gleich einem ausgestreckten, weißen, kraftlosen Finger lag es auf den Wohnblockreihen in Ōsakas Vorstädten. (S.10)

It came to rest on the residential streets of suburban Osaka like an extended, powerless, white hand. (p.7)

（5）そこでその光景は宴会というよりも，内職の夜なべ仕事に集まったような風情になった。（206頁）

Das alles trug dazu bei, daß die Atmosphäre weniger einer Feier glich, als vielmehr der Stimmung einer Gruppe, die sich zu nächtlicher Heimarbeit zusammengefunden hat. (S.203)

This made the family look as if it were working indoors on the night shift instead of attending a party. (p.179)

（4）（5）の訳では，形容詞gleich（～と同様の）や動詞gleichen（～と同様である）がなぞらえ信号になっていると言える。他にもなぞらえ信号とし

て，形容詞 ähnlich（～に類似の）や動詞 ähneln（～に似ている）を用いた訳例もあった。

### 3.2. 現実的な説明・限定として訳出

『レトリック事典』でも，比喩と比較が境界を接していること，そのどちらに分類すべきかそれほど明確でないケースがあることが紹介されている。[17] 第２グループに分類した例は，そのような境界のゆらぎを示す証拠と見なせるかもしれない。ドイツ語訳ではなぞらえ信号が消滅し，言わば現実的な説明の表現形式になっている。

（６）文楽の白太夫という人形の首に似た箒のような眉を，弥吉はそこに蠅でもたかったように突然動かしたり，とてつもない音を立てて奥歯の空洞に風をとおしたりした。（132 頁）

Yakichi zuckte immer wieder, als müsse er eine Fliege oder dergleichen von seinen besenförmigen Augenbrauen verjagen, die dem Schädel der Bunraku-Puppe Shiratayū nicht unähnlichen waren, oder er zog geräuschvoll Luft durch die Lücken zwischen seinen Backenzähnen. (S.136)

Yakichi kept twitching his thick eyebrows as if to chase away a fly or blowing noisily into a cavity in one of his back teeth. (p.117)

（６）は「～（名詞）のような」という表現が，その名詞に，-förmig という「～の形をした」を意味する形容詞を作る接尾辞をつけて処理されている。

[17] 佐藤他（2006）：193－194，198－200 頁。ドイツ語では「比較」と「直喩」の両方がともに Vergleich と称されていることも，両者の緊密な関係，そして分類の困難さを示すものだろう。

-ig や -artig, -ähnlich などの接尾辞を用いた訳例もあった。英訳は，単に thick（濃い）という形容詞にしてしまっている。

（7）この微妙な操作をわきまえた女の内部は，幽閉され，窒息させられ，爆発物のような潜在的な力を包むにいたった。（181 頁）

Das eingekerkerte, erstickte Innen dieser zu derart subtilen Manövern fähigen Frau barg die Gewalt einer Sprengladung. (S.181)

The inner world of this woman, capable of such delicate activity, was developing the captured, compressed, potential energy of an explosive. (p.158)

「～（名詞）のような」の名詞の部分が，（7）のように２格にされているケースもあった。英語は of を用いているが，ドイツ語でも von を用いての訳も可能と思われる。

（8）そして暗がりでもつれ合う彼らの脚は，無数にうごめいている別の生き物のように無気味であった。（126 頁）

Die wimmelnde Zahllosigkeit ihrer verknäuelten nackten Beine im Dunkel erweckte dabei den Eindruck einer fremdartigen, unheimlichen Bestie. (S.129)

So entangled were their legs in the darkness that they looked like some meaninglessly entangled mass of inhuman creatures. (p.111)

（8）も「～（名詞）のように」の名詞の部分が（7）と同じく２格にされて，なぞらえ信号が失われているが，それを補うように，den Eindruck

erwecken（～という印象を呼び起こす）という言い方をすることで，比喩である感じを出している。なお，直喩を印象として訳出するケースについては，第４グループにまとめた。

（９）五坪ほどの厨の土間には，一部に流れ込んだ雨水が溜んでいたが，硝子戸の灰色の光線を怠惰になぞっているその反射を，悦子は素足に貼りつく湿った下駄の上にたちつくして，火傷の中指を舌さきで舐めながら，放心したように見つめている。（144 頁）

An die fünf *tsubo* mochte die Küche messen, auf deren Lehmboden sich eine Pfütze von eingesickertem Regenwasser gebildet hatte, die nun das graue, träg durch die Glastür hereinfallende Licht reflektierte. Etsuko stand barfuß auf ihren klebrigen, nassen *geta*, leckte mit der Zungenspitze den verbrannten Mittelfinger und blickte geistesabwesend zur Tür. (S.147f.)

A puddle of rainwater covered part of the twenty square yards or so of the kitchen's earthen floor, reflecting the gray light coming lazily through the glass door. Etsuko stood barefoot in her damp, sticky *geta*, held her burned finger against the tip of her tongue and absentmindedly looked toward the door. (p.128)

（９）は「～（動詞）ように」を，その動詞を現在分詞にしてドイツ語に訳している。「放心したように」ではなく「放心して」ならば現実に放心しているわけだが，「放心したように」では厳密には放心にはまだ至っていないとも言える。しかし，「放心して」と「放心したように」の間に実際的な境界線を引くのは困難であろう。

(10) 大臣は一分一秒にセリ値のついたような彼の一日の何十分かを，この訪問の唯一の贈物として携えて来，それを重々しく主人に手渡すだろうと思われた。(91 頁)

Als einziges Gastgeschenk, dachte sie, würde der Herr Minister einige -zig Minuten seines Tages mitbringen, dessen Minuten und Sekunden sonst quasi Auktionswert hatte, und selbige überaus bedeutsam dem Hauherrn zum Präsent machen. (S.95)

The minister would be taking, it seemed, several minutes of his day, of which each minute and each second were practically objects at auction, and would be ceremonially carrying them and proffering them to his host as the only gifts of this visit. (p.81)

(10) は直喩の部分を関係文にして訳した例である。関係文は文の形で名詞（先行詞）を形容するものであるから，つまり長々しい形容詞のようなものとも言える。この例では直喩部分を関係文にしたことで，先行詞にした名詞に限定的説明を加えるという表現方式に変わっている。原文は単に想像したこと（非現実）として書いているが，ドイツ語訳ではなぞらえ信号が姿を消し，直説法で一応現実のこととして記述し，そこに quasi（いわば）という副詞を加えて現実度を低めるという手法をとっている。英訳も同様な構文になっている。

### 3.3. 単なる想像（非現実）として訳出

接続法第二式を用いてドイツ語訳されている例がかなり多く見られた。以下に示す『レトリック事典』の説明にあるとおり，接続法に，（英語なら as や like にあたる）wie と同じく，「直喩のなぞらえ信号としての資格」を認め

てよいのだろう。

「よう」は英語の as や like と同様，[なぞらえ信号として]標準形だが，変わった使い方もある。

アイがここへやって来た時の荷物は，セールスマンが持つような黒い古びたトランクひとつで……（金井美恵子「燃える指」，『夢の時間』所収）

この「ような」は，英語なら仮定法，フランス語やドイツ語ならば条件法と呼ばれる動詞（ここの場合ならば「持つ」）の変化形によって表現されるはずのものである。欧米の研究書は，条件法を直喩の形として挙げてはいないが，日本語のこの表現から逆算するならば，as や like と同じ資格を条件法に認めてもよいように思われる。[18]

(11) 彼女の看護には，何かしら第三者の目をそむけさせるようなものがあった。(44 頁)

Die Art und Weise, wie sie ihren Gatten pflegte, hätte ein unbeteiligter Dritter aber nur schwerlich mit ansehen können. (S.48f.)

Her nursing of her husband was almost enough to make an onlooker avert his eyes. (p.39)

(11) は「ような」が接続法第二式を使って訳されている。「すでに第三者は目をそむけたことがあった」と「もし第三者が見たなら目をそむけるだろう」の二つが実際には限りなく近いのは確かである。ドイツ語訳と英訳では

[18] 佐藤他 (2006)：191－192 頁。ただし，[ ]内の補いおよび波線の下線は宮内による。

用いられている本動詞が ansehen（見つめる）と avert（目をそむける）で，視線の動きが反対である。そのため比較がしにくいが，英訳は直説法を用いつつ almost を併用して非現実の含み（現実には生じなかった可能性）をもたせ，ドイツ語訳は nur schwerlich を伴わせてそのことが困難ではあるにしても現実に生じた可能性の余地を残している。

（12）歯が入歯のように端麗で，鼻孔が翼のような形をしている。（51 頁）

Ihre Zähne waren so ebenmäßig, als wären sie gar nicht echt, ihre Nasenflügel edel geschwungen wie Fittiche. (S.55f.)

Her teeth were so lovely they looked false. Her nostrils were shaped like wings. (p.45)

（12）は「よう」を２か所含むが，最初のものには als wären が用いられている。英訳は looked（見えた）を用いている。非現実の想像と現実的な印象や判断との近さがうかがわれる例である。先の「よう」も後のそれのように，あっさりと wie や like で訳すことも可能だったと思われる。

（13）この逸話は，自分の目で見た樹上の情景と相俟って，悦子の全身に針を隈なく刺されたような痛みを与えた。（166 頁）

In Verbindung mit dem, was sie vorhin gesehen hatte, verursachte diese Schilderung Etsuko einen Schmerz, als würde sie am ganzen Körper mit Nadeln gepiekt. (S.166f.)

This tale, combined with what she had seen earlier that day, made Etsuko feel as if every inch of her body had been impaled with needles. (p.145)

(13) は「～ような」が als ob と接続法第二式の組み合わせ（ただし ob は省略）で訳されている。単なる想像（非現実）でかつ直喩であるとわかりやすい例である。

(14) そんな時，電車は非常な速さで自分の巣へかえってゆく凶暴な鳴声の痩せたすらりとした夜の鳥の数十羽を，一せいに放鳥してすぎるように思われる。汽笛の羽ばたきは夜気をわななかす。(27 頁)

Dann raste in hohem Tempo der Zug heran und vorbei, wie wenn ein mehrere Dutzend starker Schwarm jener schmalen, hageren Nachtvögel aufgescheucht worden wäre, die sonst immer mit schrillem Kreischen ihren Nestern zustieben. Der Pfiff ließ die Nacht erschauern. (S.31)

At times the whistle of the Hankyu train sent its note reverberating over the dark ricefields, like a flock of scrawny night birds flying swiftly with raucous cries. The beating wings of the train whistle set the night air trembling. (p.23)

(14) は「～ように」が wie wenn と接続法第二式で訳されている。原文の「思われる」は，誰にとってそう思われるのだろうか。誰の認知であるのか，日本語はそれを明示せずに表現できる。ドイツ語訳はその部分を訳出していない。

(15) このとき再び獅子頭は，群集からぬきん出てあたりを睥睨するように思われたが，それは忽ち狂おしく方向を転じ，緑の鬣をひるがえして見物のなかへ分け入った。(127 頁)

Wiederum erhob sich das Löwenhaupt über die Menge, als wolle es sich

einen Überblick verschaffen, änderte dann aber wie aus einer plötzlichen Laune die Richtung und fuhr mit wehender grüner Mähne stracks mitten in die Zuschauer und auf das Torii vor dem Portal des Hauptschreins zu. (S.131)

Again the lion's head stood out above the crowd, seeming to survey the entire scene. Then it capriciously changed direction and headed straight into the spectators, green mane floating proudly, moving toward the main *torii* at the front of the shrine. (pp.112-113)

(15) は「～ように」が als ob（ただし ob は省略）と接続法第一式で訳されている。この例でも「思われる」の部分が訳出されていない。

### 3.4. 対象が発する印象として訳出

(16) こういう当て物の言い争いに興じながら，意見が岐れて口喧嘩をはじめる夫婦の若々しさは，まるで芝居をやっているのじゃないかと思われるほどで，三十八歳と三十七歳になる夫婦の会話とは思えなかった。（114 頁）

Diese Wortgefechte im Ratespiel und die mitunter sehr temperamentvoll geäußerten Meinungen des Ehepaares entfernten sich bisweilen so weit voneinander, daß sie fast in echten Streit überzugehen drohten. Das Ganze erweckte viel mehr den Eindruck, man wohne einem Theaterstück bei als der Unterhaltung eines achtunddreißigjährigen Mannes mit seiner siebenunddreißigjährigen Frau. (S.117)

They were so lost in the joy of this guessing game, so puerile in the

differing opinions that brought them to the verge of quarreling, that they sounded as though they were taking part in a play. It was hard to believe their conversation was carried out by a husband of thirty-eight and a wife of thirty-seven. (p.100)

「まるで～と思われるほど」もなぞらえ信号の一種と言えるだろう。これを含む(16)は，接続法第一式と(8)でも用いられていた den Eindruck erwecken（～という印象を呼び起こす）を組み合わせて訳されている。「思われる」の部分をドイツ語では das Ganze（その全体）を主語にすえて，den Eindruck を目的語にして表現することで，誰にとってそう思われたのかの「誰」を示すことを回避している。

(17) 今以てこの良風美俗を遵奉(じゅんぽう)している彼らは，流行おくれの女の髪型が，田舎へくるといまだにハイカラ顔していられるようなものだった。（115 頁）

Diesen gutartigen Ästheten immer noch verbunden, erinnerten die beiden an eine Frau mit einer längst aus der Mode gekommenen Frisur, die in der Provinz aber immer noch als chic gilt. (S.118)

In their respectful pursuit of the forms of the grand tradition even into this time, however, they were like a woman wearing last year's hairdo among country folk, as if it were still the mode. (p.102)

(17) は「～ような」が erinnern を用いて訳されている例である。erinnern は本来他動詞であるが，目的語なしで使われることもあり，ちょうど日本語の「～を思わせる」程度の意味になるので，直喩のなぞらえ信号の資格があ

ると言えるかもしれない。英訳には，ドイツ語の als ob に当たる as if が用いられている。

(18) 莫迦な男どもがいかにも神秘的だと言って珍重しそうな女だと悦子は見た。(51 頁)

Etsuko vermutete, daß das Wesen solcher Frauen auf die einfältigeren unter den Männern exotisch wirkte. (S.56)

Etsuko saw her as a woman stupid men might find exotic. (p.45)

(18) の「～しそうな」もなぞらえ信号であり直喩表現を作っているが，ドイツ語訳は「女」の方を主語に，動詞 wirken を用いて，「莫迦な男ども」に対してそういう作用を及ぼす，という構文で表現している。ちなみに英訳は，主語は「莫迦な男ども」のままにし，might（かもしれない）を用いてたとえの感じを出している。

(19) 人間の頭部でいちばん動物的な格好をした耳が，老人にあっては智恵の化身のように思われる。(67 頁)

Der tierähnlichste Teil des menschlichen Kopfes, die Ohren, gelten im Falle der Alten als Verkörperung der Klugheit. (S.71f.)

The ears, which in shape seem more like the property of an animal than any other part of the human body, are in an old man the very incarnation of intelligence. (p.59)

(19) は「～のように思われる」が als～ gelten を用いて訳されている例である。ここでも「思われる」という，認知の主体を明示しない日本語表現の

特色に気づかされる。

(20) そしてこれらの全貌は，拝殿の石段の上から見ると，焚火のまわりをのたうちまわっている巨大な，仄暗い，ところどころが燐光を放っている蛇体としか思われなかった。(123 頁)

Von den oberen Stufen der Steintreppe vor der Haupthalle aus schien es, als winde sich eine gigantische, dunkle Schlange um lodernde Feuer und schleuderte dabei nach allen Richtungen glühende Funken. (S.127)

The whole scene, as viewed form the top of the stone steps of the sanctuary, seemed like the form of a great dusky snake, writhing about the flaming poles, throwing off phosphorescence in all directions. (p.109)

(20) は「～としか思われない」が scheinen と，als ob（ただし ob は省略）を伴った接続法第一式および第二式を使って訳されている例である。aussehen や scheinen はものの外観について，それが放つ印象を表現するという方向の動詞である。「思われる」が受け手側が認知するイメージを語っているのと，方向が逆であるところが興味深い。

(21) 雨後のさわやかな大気のなかにひそむ無数の快活な微粒子のようなもの，新らしい結合へと急いで小躍りしている無数の元素のようなもの，それらの透明な気配を鼻腔に嗅ぎ，ほてりはじめた頬の皮膚に思うさま味わいながら，二人はしばらく黙ったまま無人の自動車路を歩きつづけた。(152 頁)

Es war, als hingen nach dem Regen zahllose heitere Partikelchen in der frischen Luft, zahllose Elemente, die hurtig auf neue Verbindungen

zuzutanzen schienen, deren flüchtige Anzeichen die beiden sich nach Herzenslust in die Nasen steigen und die Haut ihrer Wangen röten ließen, als sie eine Weile schweigend auf der menschenleeren Autostraße dahingingen. (S.154)

What seemed like a myriad of joyful particles hidden in the rain-fresh air, what seemed like a myriad of elements hurrying, dancing toward a new combining – all these pellucid intimations struck their nostrils and made their cheeks glow as they walked in silence for a time on the untraveled road. (p.134)

(21) は「～のようなもの」が２か所含まれている。片方は als ob（ただし ob は省略）と接続法第二式の組み合わせで訳されている。もう一方は，(20) とは異なり (21) の原文には「思われる」が含まれていないが，ここでも scheinen が用いられている（ドイツ語訳をそのまま日本語に戻すなら「小躍りしているように見える無数の元素」となる)。scheinen は当該のものが放つ印象を表現するので，誰にとってそう見えるのかは焦点ではないのであろう。

## 4．考察

以上，『愛の渇き』に見られる直喩表現のドイツ語訳を，４つのグループに分けて例を挙げつつ紹介してきた。第１のグループは「よう」などの日本語のなぞらえ信号を，wie を代表とするなぞらえ信号を用いて訳しているパターンだった。この訳出パターン――すなわち，日本語の直喩表現をそのままドイツ語の直喩表現にする――が，当然とも言えるが，もっとも多用されていた。しかしヴァインリヒが「それを使ってなんでも，生来似ているもの

であろうがなかろうが互いに比較できる」[19] として説明している wie ではあるのに，wie を用いない訳例がかなり見られるので，wie 以外のドイツ語表現へと翻訳者を誘う要素が「よう」には含まれているのかもしれない。

第２のグループは，なぞらえ信号にあたるものがドイツ語訳では消滅しているパターンである。「～（名詞）のような」の名詞部分を形容詞にしたり，あるいは２格にする。ないしは比喩部分を関係文という形での修飾部分にしたりして，形式だけを見るならば，比喩がたとえ（虚構）ではなく，現実的な（「直説法の世界」的と言うべきか）説明と化している。

第３のグループは，第２グループとは対照的に，比喩が単なる想像（非現実）であることを前面に押し出して，接続法第二式（場合によっては第一式）を用いて訳しているパターンである。しばしば伴われている als ob や wie wenn との組み合わせが「あたかも～のように」という日本語にされることを考えると，直喩の訳としてこのパターンがかなり多用されるであろうことは納得がいくので，上でも触れたが，欧米のレトリック研究ではこのような接続法が直喩の形として挙げられていないというのがかえって興味深く思われる。[20]

第４グループは，「～のように」がときに「～のように思われる」と「思われる」を伴うことと関連して，wirken, gelten, aussehen, scheinen 等を用いての訳例を集めた。これは，日本語表現では書き手がテクスト内に入り込んでいて，それがときに顔を出すという現象と関連しているのではないだろう

---

[19] ヴァインリヒ（2003）：781 頁。「開かれた比較 wie[のように]／比較結合詞 wie が導入する比較は「開かれた比較」である。というのもこの結合詞はその意味特徴＜同列におく＞の他は，意味論的にはそれ以上有標ではないからである。したがって，それを使ってなんでも，生来似ているものであろうがなかろうが互いに比較できる。」

[20] 日本のドイツ語文法書では，接続法第二式と als ob などの組み合わせの用法を「比喩」と名づけているものもある（井口（1990）：192 頁）。1956 年に出版された橋本文夫の文法書には，「als ob に始まる間接話法」という項目があり，als ob は印象を表わすとし，「als ob に始まるこの形式を非現実話法に入れる文法家もあるが，誤りである」と断言している（橋本（1956）：211－212 頁）。

か。ドイツ語にする場合は，印象を受け取った側からではなく，事物や事象を主語にすえて，それらが放つ印象という方向での表現にされているのは面白い。

第２，第３グループの訳例から，比喩内容を現実の側に引き寄せることも，逆に非現実の側に引き寄せて解釈することも可能なことがわかる。より正確には，比喩には現実・非現実の両側に足をかけているようなところがあり，ケースごとにどちらに重心があるかが微妙に異なる。日本語の「よう」を用いた比喩表現のうち，非現実的な様相を呈しているものが「虚構の比較」[21]として，接続法第二式を用いてドイツ語訳されるのではないだろうか。ドイツ語では Vergleich（比較および直喩）を現実のそれと虚構のそれに区別するという背景がある。[22] そのため原作の直喩表現にぶつかる都度，翻訳者はそれが現実的なものなのか，虚構（非現実）的なものなのか，判断して翻訳作業を進めたのではないだろうか。そのような判断を経て出てきた訳文は，一般に翻訳文は原文よりも説明的になるという傾向とも一致するだろう。[23]

直喩を始めとした比喩はそれではないものを用いて，それを説明する。比喩によって現実と別の現実ないしは非現実が結ばれる。比喩によって，あるものが別の関連の中に位置づけられる。比喩という想像行為によって，新たな（たいていはヴァーチャルで暫定的な）関係性が創造されるが，もともとの事物の関係性のあり方（通常の言語の使い方）にしても，人間の認知がもつ恣意性を反映している。直喩で結ばれることによって新たな関係性が成立すると，現実と別の現実ないしは非現実が意外に近い距離にあることに気づ

---

21 ヴァインリヒは als ob を「虚構の比較」に用いるものとし，事柄がそれまで通用している考えや想像と遥かにかけ離れていることを強調することができる，と説明している（ヴァインリヒ（2003）：782 頁）。

22 Helbig/Buscha (1991): S.452 では，wie を現実の比較（realer Vergleich），als ob / als wenn / wie wenn を虚構の比較（irrealer Vergleich）に用いる接続詞としている。

23 藤澤（2007）で，比喩表現の翻訳においても翻訳文が原文よりも説明的になる傾向が示唆されている。

かされる。直喩などの比喩は，ものごとの関係性を結びなおすとも言えそうである。

## 5．おわりに

『愛の渇き』の三郎は，悦子から，美代を愛しているのか，誰を愛しているのかと問われて，答に窮する。三郎には「愛」ということばの意味するところが不明なのである。近代的恋愛を信奉する悦子との会話はまるでかみあわず，漫才のようでさえある。

> 三郎にもっとも理解しがたいのはこの言葉だった。その言葉が彼には自分から遠いところにある，別誂えの，贅沢な語彙に属しているように思われた。その言葉には何かしら剰余なもの，切実ならぬ，はみ出したものがあった。彼自身と美代とをつないでいる切実な関係，とはいうものの，必ずしも永続的な関係ではない，ある半径のなかに置かれてこそ引きあわずにはやまないがその外へ出ればもはや引きあわない磁石のような関係には，愛という言葉は甚だ妥当を欠くように思われた。（153－154 頁）

この一見便利そうな合言葉は，彼には依然として，彼が行きあたりばったりに送って来た気楽な生活に余計な意味をつけ，また彼が今後送るべき生活に枠をはめこむ，何かしら剰余の概念としか思えなかった。この言葉が日用必需品として存在し，時と場合によってはこの言葉に生死も賭けられる，そういう生活の営まれる一室を彼はもたない。持たないばかりか，想像することさえ容易でない。ましてそんな一室の持主の，その部屋を亡ぼすために家全体に火を放つような愚行のたぐいは，彼に

は笑止のいたりだったのである。(220－221 頁)

ことばが世の中のこと，あるいは森羅万象を表現する手段として，また他者との伝達道具として，それほど使いやすいものでないことは承知しておいた方がよいのだろう。ものごとが無限であるのに対し，ことばの方は有限である。有限なことばでもって，無限の事象を表現するにはどうしたらよいのか。そのためのテクニックが種々のレトリックである。あることがらに対してぴったりのことばが存在しないとき，それに少しでも近い表現を探して私たちは努力する。直喩などの比喩は，対象を的確に表現するための有効な補助手段の一つである。三島の比喩に彩られたバロック的とも評される文章からは，正確な表現を目指す強い意志と真摯な姿勢が伝わってくるようである。

三島の比喩がときに凝りすぎて奇抜に見えるとしても，この作家にはそれ以外の表現方法がなかったと考えるべきだろう。彼には「自然な」ことがないので，自然な表現がない。自然のままに振る舞うなど考えられない。そういうことがあり得るとも思えない。三島の振る舞いが自然に見えるときがあるとしたら（たとえば『潮騒』)，それは人間の自然な振る舞いについて研究を重ねたうえでの演技なのである。

使用テキスト

原作：三島由紀夫『愛の渇き』新潮文庫，2007 年（116 刷）

(『三島由紀夫全集』第 4 巻（新潮社，1977 年）および『決定版三島由紀夫全集』第 2 巻（新潮社，2001 年）に所収の版も参照した)

ドイツ語訳：Mishima Yukio: *Liebesdurst.* Aus dem Japanischen übertragen von

Josef Bohaczek. Frankfurt am Main und Leipzig (Insel), 2000.

英語訳：Yukio Mishima: *Thirst for Love.* Translated from the Japanese by Alfred H. Marks. London (Vintage), 2009.

（英語訳の初版は 1969 年に Alfred A. Knopf (New York) より刊行）

参考文献

尼ヶ崎彬（1988）:『日本のレトリック：演技する言葉』筑摩書房

井口省吾（1990）:『詳解　実践ドイツ語文法』東洋出版

板坂剛（2010）:『三島由紀夫と一九七〇年』鹿砦社

ハラルト・ヴァインリヒ（2003）:『テクストからみたドイツ文法』脇坂豊他訳，三修社

岡本正明（1990）:「アメリカ作家の見たミシマ：ヘンリー・ミラーを中心に」『新潮』1990 年 12 月号，258-259 頁

河合譲（1967）:「日本文学翻訳の理論と実践：特に三島由紀夫『金閣寺』の英訳を中心として」『広島商大論集，商経編』第 7 巻，第 2 号，171-195 頁

川端康成（1969）:『美しい日本の私：その序説』講談社現代新書

佐藤信夫（1992）:『レトリック感覚』講談社学術文庫

佐藤信夫，佐々木健一，松尾大（2006）:『レトリック事典』大修館書店

柴田翔（2011）:「不可能に焦がれる大辞典：GROSSES JAPANISCH-DEUTSCHES WÖRTERBUCH（和独大辞典）／瞥見」，日本独文学会『ドイツ文学』第 142 号，203-209 頁

中央公論編集部（2010）:『中央公論特別編集　三島由紀夫と戦後』中央公論新社

ジェラルディン・ハートコート，ラルフ・マッカーシー，ジョン・ベスター

(1990):「翻訳の難しさと楽しさ(座談会)」『群像』1990年9月号,206-221頁

橋本文夫 (1956):『詳解ドイツ大文法』三修社

イルメラ・日地谷=キルシュネライト (1990):「ドイツ時代精神の反映として (海外の MISHIMA ドイツ)」『新潮』1990 年 12 月号, 262-263 頁

イルメラ・日地谷=キルシュネライト (1994):「日本文学の翻訳は不可能か」『群像』1994 年 11 月号, 182-190 頁

藤澤文子 (2007):「比喩表現の翻訳について」, 神戸大学ドイツ文学論集刊行会『ドイツ文学論集』第 36 号, 31-53 頁

ジョン・ベスタ (1990):「翻訳者の立場から」『新潮』1990 年 12 月号, 239-242 頁

三島由紀夫 (1973):『文章読本』中公文庫。(『三島由紀夫全集』第 28 巻 (新潮社, 1978 年) および『決定版三島由紀夫全集』第 31 巻 (新潮社, 2003 年) に所収の版も参照した)

満谷マーガレット (1990):「ミシマからハルキまで:日本文学翻訳の現況」『群像』1990 年 9 月号, 222-229 頁

宮内伸子 (2009):「「自然の成り行き」と「空気」のドイツ語への訳され方:吉本ばななの『キッチン』の訳を手がかりに」, 日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』第 7 号, 61-79 頁

宮内伸子 (2010):「翻訳で確認する日本語の省筆の美:川端康成の『山の音』のドイツ語訳を手がかりに」, 日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』第 8 号, 28-53 頁

アルベルト・モラヴィア (1990):「三島邸での一日」千種堅訳,『新潮』1990 年 12 月号, 243-246 頁

横尾忠則, 平野啓一郎, 田中慎弥, 中村文則 (2010):「2010 年の三島由紀夫

（座談会　没後四十年）」『文学界』2010 年 12 月号，186-205 頁
ジャン＝ミッシェル・ラバテ（1990）：「三島とニヒリスムの美」野崎歓訳，『新潮』1990 年 12 月号，247-257 頁
ドナルド・リチー（2001）：「三島の思い出：最後の真の侍」『決定版三島由紀夫全集』第 9 巻，月報，新潮社

Junko Ando, Irmela Hijiya-Kirschnereit, Mathias Hoop (Hg.) (2006): *Japanische Literatur im Spiegel deutscher Rezensionen.* Bibliographische Arbeiten aus dem Deutschen Institut für Janpanstudien. München: Iudicium.

Gerhard Helbig, Joachim Buscha (1991): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht.* 13. durchgesehene Auflage. Leipzig, Berlin, München: Langenscheidt.

Irmela Hijiya-Kirschnereit (2000a): *Japanische Gegenwartsliteratur: Ein Handbuch.* München: edition text + kritik.

Irmela Hijiya-Kirschnereit (2000b): Nachwort von *Liebesdurst.* Frankfurt am Main und Leipzig: Insel, S.231-240.

Irmela Hijiya-Kirschnereit, Gerhard Bierwirth (Hg.) (2010): *Yukio Mishima. Poesie, Performanz und Politik.* München: Iudicium.

# Wie übersetzt man japanische Vergleiche ins Deutsche?

## — Anhand einer Gegenüberstellung von Mishima Yukios Roman „Liebesdurst“ mit der deutschen Übersetzung —

MIYAUCHI, Nobuko

Mishima Yukio war einer der berühmtesten japanischen Schriftsteller des 20. Jahrhunderts. Viele seiner Werke wurden schon früh in mehrere Fremdsprachen übersetzt. Der Schriftsteller, der vor 40 Jahren durch Seppuku Selbstmord beging, schätzte die alte japanische Tradition so hoch wie Kawabata Yasunari. Beider Stile sind aber sehr unterschiedlich. Während Kawabatas Ausdrucksweise, wie ich schon einmal behandelt habe, vage und elliptisch ist, beschreibt Mishima die Dinge klar und deutlich. Dabei verwendet er oft sehr treffende Vergleiche. Er zieht alle Register der Rhetorik, so kann man es zweifellos bezeichnen. In diesem Beitrag wird überprüft, wie Mishimas Vergleiche ins Deutsche übersetzt worden sind.

Das rhetorische Mittel des Vergleichs beruht auf der Entdeckung einer Gemeinsamkeit von zwei ansonsten verschiedenen Dingen. Anders als die Metapher enthält der Vergleich eine Kennzeichnung des Vergleichs (Vergleich-Signal). Durch diese Kennzeichnung kann man auch ausgefallene Vergleiche anstellen ohne die Gefahr, missverstanden zu werden. Die gebräuchlichste Kennzeichnung eines Vergleichs auf Japanisch ist YOU (normalerweise als YOU-NA oder YOU-NI). In dieser Arbeit wurden Vergleiche in „Liebesdurst“, die mit „YOU“ formuliert sind, der deutschen Übersetzung

gegenübergestellt und überprüft.

Zu meiner Überraschung ergab sich, dass die Vergleiche sehr vielfältig ins Deutsche übersetzt worden sind. Doch wie wurden die Vergleiche interpretiert und übersetzt? Das Resultat habe ich in 4 Gruppen eingeteilt:

1. als realer Vergleich
2. als realer Vergleich ohne Vergleich-Signal
3. als irrealer Vergleich
4. als Eindruck

Gruppe 1: Die Vergleiche mit „YOU" sind am häufigsten durch die deutsche Konjunktion „wie" übersetzt worden. Zwar könnte man „wie" in allen Fällen verwenden. Es gibt aber im Deutschen die Tendenz, bei Vergleichen genau zu unterscheiden, ob sie real oder irreal sind. Das ist wahrscheinlich der Grund für die Vielfältigkeit in der Übersetzung. Gruppe 1 ist die größte.

Gruppe 2: Wenn man einen Vergleich als real versteht, kann auch der japanische Vergleich ohne Vergleich-Signal adjektivisiert werden.

Gruppe 3: Wenn man umgekehrt einen Vergleich als irreal interpretiert, übersetzt man ihn nicht durch „wie" sondern durch „als ob". Gruppe 3 ist die zweitgrößte.

Gruppe 4: Es gibt auch eine Ausdrucksweise bei japanischen Vergleichen, die mit „NO-YOUNI OMOWARERU" wiedergegeben wird. OMOWARERU bedeutet, dass man diesen Eindruck hat. Auf Japanisch braucht nicht ausgedrückt zu werden, wer diesen Eindruck gewonnen hat. Im deutschen Satz muss aber unbedingt ein Subjekt stehen. Daher werden japanische Vergleiche mit dem Ausdruck „NO-YOUNI OMOWARERU" in deutsche Sätze übersetzt, die eine andere Struktur oder semantisch eine andere Richtung haben, z.B. „den Eindruck

erwecken“, „scheinen“, „gelten“ oder „erinnern an“.

Im Allgemeinen wird beim Übersetzen die Tendenz beobachtet, dass der übersetzte Ausdruck erklärender als das Original ist. Der deutsche Versuch, japanische Vergleiche durch den Realitätsgrad zu sortieren, passt sich dieser Tendenz an. Es ist jedoch oft schwierig zu beurteilen, ob ein Vergleich real oder irreal ist. Denn Vergleiche haben mit der Imagination zu tun. Außerdem reflektiert die Welt unserer Sprache ursprünglich die Willkür unserer Anerkennung. Vergleiche bringen zwei Dinge in Beziehung, dadurch kann man auch neue Beziehungen zwischen Realem und Irrealem entdecken.

Sprache beziehungsweise Worte sind begrenzt, während das All unendlich ist. Um das All in Worte zu fassen, dazu braucht es Rhetorik. Mishimas Stil mit den vielen Vergleichen bringt seinen starken Willen und seine ernsthafte künstlerische Absicht zum Ausdruck. Auch wenn Mishimas Vergleiche manchmal eigenartig oder sogar gekünstelt erscheinen, konnte er sie nur auf diese Weise ausdrücken.